



四川大学外国语学院
学术文丛

关于亲鸞『信』
理论的思想史考察

親鸞における「信」
についての思想史的考察

张维薇 著



Sichuan University Press
四川大学出版社

关于亲鸾『信』
理论的思想史考察

親鸞における「信」 についての思想史的考察

张维薇 著



Sichuan University Press
四川大学出版社

责任编辑:黄新路
责任校对:夏宇
封面设计:米茄设计工作室
责任印制:王炜

图书在版编目(CIP)数据

关于亲鸾“信”理论的思想史考察:日文 / 张维薇
著. —成都:四川大学出版社, 2013.3

(四川大学外国语学院学术文丛)

ISBN 978-7-5614-6594-3

I. ①关… II. ①张… III. ①亲鸾(1173~1262) —
思想评论—日文 IV. ①B949.931.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2013)第 057089 号

书名 关于亲鸾“信”理论的思想史考察

Guanyu Qinluan Xin Lilun De Sixiangshi Kaocha

著者	张维薇
出版	四川大学出版社
地址	成都市一环路南一段 24 号 (610065)
发行	四川大学出版社
书号	ISBN 978-7-5614-6594-3
印刷	四川和乐印务有限责任公司
成品尺寸	148 mm×210 mm
印张	8.125
字数	272 千字
版次	2013 年 3 月第 1 版
印次	2013 年 3 月第 1 次印刷
定价	28.00 元

版权所有◆侵权必究

◆读者邮购本书,请与本社发行科
联系。电话:85408408/85401670/
85408023 邮政编码:610065

◆本社图书如有印装质量问题,请
寄回出版社调换。

◆网址: <http://www.scup.cn>

序

正直に言って、鎌倉仏教については、自分なりに勉強をしてき、親鸞についてもある程度は読んできたつもりでいるのだが、にもかかわらずあえてその思想を語る自信はなかった。それは、言うまでもなく、『歎異抄』や『教行信証』を読むだけでなく、もっと突っ込んだ研究を積み重ねたうえ、その思想と実践的行動への全面的把握はまだまだ十分にできていないからである。残念なことに、ここ十数年来、日頃行政の仕事に追われて、中々研究に専念できない状態が続き、予てからの念願の実現も遠ざかっていく一方である。でも、日本仏教史や日本思想史を勉強し始めた時から、いわゆる「鎌倉新仏教」の象徴的存在の一つとしての親鸞に早くも関心が惹かれ、その伝統的旧仏教の常識に反した革命的ともいえるべき「悪人正機説」の提唱と、肉食妻帯に踏み切った行為に甚だ興味を覚え、いずれは自らも腰を据えて少なくとも自分なりに納得できるまでじっくり研究しようとの初一念は未だに消えていない。そんな心残りのある私をすこしは釈然させてくれたのは、張維薇君である。

張さんは、2008年9月から博士課程に入り、日本仏教史や仏教思想についてはほとんど文字通り門外漢そのものであったが、何故か入学した時点から日本仏教思想に濃厚なる興味を示し、飢えるがごとく渇くがごとし猛勉強した挙句、2年目から親鸞研究に挑戦してみたいと言って来た。心のどこかの片隅に前述のような遺憾を抱いている私には、弟子が師から勧められるのではなく、自ら進んでその研究に励もうとしてくれるのだから、それ以



上嬉しいことがあるだろうか。ただ、特に『教行信証』のごとき、あれだけ難解な著作に挑戦するなんて感心してはいるが、彼女の力ではこの限られた3年間でどの程度の仕事ができるのかと思うと、正直なところ心配でたまらない日々が多かった。いつもばたばたしている私は時々出来るだけの助言はしているが、ほとんどそばでそっと見守るしかできない状態であった。こんな厳しい状況の中でも、彼女のたゆまぬ努力と辛抱強い根気と執念が実ったのは、本書である。

本書は、従来の伝記研究と宗学の釈義とは異なり、親鸞のあらゆる原典著作を厳密に考察し、その生涯の順に従って、当時の時代背景も念頭に入れながらそれぞれの時期の代表作を解説していく。そうすることにより、親鸞思想の発展の道のりや各時期の特徴を究明するだけでなく、その思想の特質たるものを異なる角度からとらえ、その日本思想史における意義や新たな位置づけを試みようとする意欲的なものである。

親鸞思想に対する分析やその思想の特質への把握は多少は未成熟なもので納得しがたい部分が認められるとはいえ、しっかりした研究方法をもちいて、着実に考察、解説し、かなり説得力のある結論を導き出している。従来の庶民思想家との認識の枠を乗り越え、親鸞の全著作を貫いている「信」を主な着眼点にし、その「信」の起源、発展及びその変容の軌跡を探り、「信」の思想と理念を、親鸞思想の大きな特質としてとらえ、今までのイメージとはちょっと違う親鸞像を描こうとする意欲と見解は評価すべきであろう。特に、従来の研究ではあまり触れていない『唯信抄文意』、『一念多念文意』など、晩年時期の消息、法語などの資料をも検討し、従来の研究の不足をある程度補うことができた。こ

の成果を学問生涯の良いスタートとし、もっともっと活躍していくことを願ってやまない次第である。

広東外語外貿大学教授 韋立新

2012 年 10 月 8 日

要 旨

浄土真宗の祖師である親鸞（1173－1262）は、鎌倉新仏教における最も代表的な思想家として、日本浄土教史上、決定的な意味を有する人物である。従来の研究は親鸞伝や語録『歎異抄』が重視され、すでに親鸞を「庶民仏教思想家」と位置づけている。にもかかわらず、庶民思想はその生涯の段階的思想として、親鸞思想の全貌を概括できるわけではない。親鸞の生涯を貫いている全著作を考察すると、その思想の根底には「信」という理念が流れていることを感得する。それぞれの時期の信の思想が連なり、親鸞思想の発生、発展及び変容の軌跡が明らかになり、より真実の親鸞像が浮かんでくる。

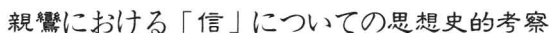
鎌倉時代の初期、法然（1133-1212）は初めて専修念仏を唱導して、浄土宗を興した。親鸞は法然の直弟子として、その思想の確立も専修念仏を背景としている。阿弥陀仏を信じて念仏すれば往生できるという称名の思想は、その内面には精神的なものが強められ、親鸞思想の確立のための基盤を築いた。一方、早く平安時代から日本社会に流行してきて、すでに深刻化した末法観に拍車をかけられ、僧侶の女犯は仏教界をわたって常態となり、親鸞の妻帯は即ちその時代の現実と人間性と結合して成された産物だと言える。

越後流罪の間、親鸞の思想は大きな発展を遂げ、その独特の信の思想が萌芽した。この時期、その非僧非俗の破戒体験は自ら愚痴の破戒僧と自覚させ、遂に「愚禿」という反省の姿が現れてきた。信は即ち愚禿としての自覚内省によって生じたものである。

その思想の根底に潜んでいる愚禿の懺悔は、信の源そのものである。その早期の著述『愚禿鈔』は自力の信から他力の信へ転換し、仏から廻向された他力の信心を開示し、信の思想の初歩的な確立を示すものであるとともに、信の他力的特質も定めた。

関東在住の間、親鸞はその半生の心血を注ぎ、真宗の教義經典である『教行信証』を著し、信の理論を打ち立てた。この著書では「唯信」という理念に立脚し、信は往生の唯一の条件であると力説されている。なお、三心一心という問題の解明を以て、至心、信樂、欲生の三心を信樂に歸し、信樂を中核とする信の理論を組み立てた。更に、法然による行一念より一步進んで信一念の理論を立て、信の他力的性格も強調する。『教行信証』の成立は承元法難を初めとする頻繁かつ苛酷な政治弾圧を背景とし、外界からの風紀問題の糾弾に対処し、肉食妻帯の宗風を遂行している真宗教団に世の認可を受けさせようとする意図が現れてくる。更に、信巻の末に説かれる「唯除五逆正法」及び化身土巻の中に唱えられる「末法無戒」は、いっそうこの本による破戒正当化の旨をはっきりさせ、この時期における信の歴史的現実性及び時代的意義を裏付ける。

関東時期の思想の重要な一部として、いわゆる庶民思想が積極的に展開されてきた。この庶民思想は、浄土教に原存在している庶民的性格及び鎌倉新仏教の全体に溢れている庶民風に関わりと同時に、この時期における信の民衆化の結果とし、「自信教人信」の理念を実践したところでもある。関東の農村における二十年間余りの布教生活を通して、親鸞は信を民衆の救済に生かし、善悪平等、悪人往生、広渡有縁、同朋などの理念を用いて信の庶民教化を展開し、史上最も広大な民衆教団を作り上げた。その平等大



信の起源や発展及び変容の軌跡により、親鸞の人物像も明らかに浮かんでくる。唯信、他力を特徴としている信の思想は、前代の仏教による信心を徹底し、一種絶対、無条件の信を立て、明らかに精神救済という性格を持っている。一方、信は鎌倉新仏教の庶民性を裏付けていると同時に、仏教の在家を実現させ、近代仏教における全面的な在家化をリードしたとも言える。新仏教による「民衆」と「世俗」という二元的性格が、それによって統一されてきた。このような信の理念は、早く鎌倉時代において宗教思想の中核に触れていたとされ、日本思想史は言うまでもなく、人間の精神史や哲学史における意義も見落とせないのである。

vi

凡 例

一、本文に見える親鸞の著作の原文は『定本親鸞聖人全集』（法蔵館、1969、文中『全集』と略す）に収録された親鸞の原典によるものである。『教行信証』は第一卷[上・下]、『愚禿鈔』は第三卷の漢文篇、『歎異抄』は第四卷の言行篇[1]、『末燈抄』は第三卷の書簡篇、『三帖和讃』、『太子和讃』は第二卷の和讃篇、『三経往生文類』、『一念多念文意』、『唯信抄文意』は第三卷の和文篇によるものである。

二、親鸞に関する基本史料である『親鸞伝絵』（『本願寺聖人親鸞伝絵』、『善信聖人伝絵』）は『定本親鸞聖人全集』（法蔵館、1969）の第二卷の言行篇[2]によるもの、『恵信尼文書』は第二卷の書簡篇、『改邪抄』は第二卷の言行篇[1]によるものである。

三、本文に参考される親鸞の著作の現代日本語の訳文は、金子大栄氏による原典校注版の『真宗聖典』（法蔵館、1975）、家永三郎氏の『日本思想大系 11－親鸞』（岩波書店、1971）、名畑応順の『親鸞和讃集』（岩波書店、1976）などによるものである。

四、本文に見える固有名詞と引用文の文字はすでに現代日本語の当用漢字にし、それにはないものはそのまま漢文の繁体字にする。

目次

一 序論	1
1.1 問題の提起—思想史的視座からの親鸞研究	2
1.2 生涯の概観	3
1.3 親鸞研究史の回顧	6
1.3.1 研究史の概観	6
1.3.2 研究史の問題点	13
1.3.3 思想史的研究の新動向	14
1.4 本研究の方法、特色及び意義	16
1.4.1 本研究の方法及び視角	16
1.4.2 本研究の特色	17
1.4.3 本研究の意義	17
1.4.4 原典及び関係史料	19
1.5 本研究の内容と構成	20
二 信心の源	23
2.1 法然思想の受容	24
2.1.1 法然の思想	24
2.1.2 法然入信の理由	27
2.1.3 菩提心に関する疑問	29
2.1.4 法然思想の継承	32
2.2 妻帯及びその神格化	34
2.2.1 妻帯	34
2.2.2 親鸞伝における妻帯の神格化	40



2.3 妻帯—歴史的な現実性と人間性	48
2.3.1 妻帯の歴史的な現実性	48
2.3.2 六角堂夢告	52
2.3.3 妻帯による人間性	56
2.4 まとめ	58
三 信心の発生	59
3.1 越後の流罪及び布教	60
3.1.1 承元法難の流罪記録	60
3.1.2 越後での布教	64
3.2 「愚禿」の内省と懺悔	65
3.2.1 北越流罪の辛酸	65
3.2.2 「愚禿」による懺悔の内観	66
3.2.3 人間性における内省	68
3.2.4 『三部経』の千部暗誦及び業報観	69
3.3 『愚禿鈔』における信の発生	71
3.3.1 『愚禿鈔』の撰述年時	72
3.3.2 題下及び構造	73
3.3.3 三心釈における信心の開示	75
3.4 まとめ	89
四 信の理論の確立	91
4.1 信の仏教史における地位	92
4.1.1 関東移住と『教行信証』の撰述	92
4.1.2 教義経典『教行信証』	93
4.2 信の意味—信巻に関する再考察	96
4.2.1 信	96

4.2.2	三心一心—信樂	98
4.2.3	信一念	102
4.2.4	信の他力的性格	105
4.3	『教行信証』の撰述背景についての再考察	109
4.3.1	師恩報謝と懺悔	110
4.3.2	『興福寺奏状』の再考	112
4.3.3	幕府の弾圧	114
4.3.4	破戒の正当化	118
4.4	信の歴史的現実性—信巻、化巻を中心に	120
4.4.1	在家的理論としての信	120
4.4.2	信巻末についての検討	121
4.4.3	無戒破戒—化巻にみる『末法燈明記』	125
4.5	まとめ	130
五	関東時期の信と庶民思想	131
5.1	関東教団及び庶民思想の基盤	132
5.1.1	民間の生活及び立場の転換	132
5.1.2	念仏教団の社会的基盤—耕作農民	133
5.1.3	庶民思想の述懐—語録『歎異抄』	135
5.2	『歎異抄』における庶民救済論	136
5.2.1	善悪平等	137
5.2.2	悪人往生論	139
5.2.3	「悪人」の意味	143
5.2.4	広渡有縁	147
5.2.5	同朋	149
5.3	「自信教人信」—『歎異抄』の民衆教化	151
5.3.1	信心重視	151



5.3.2	信の縁起及びその伝承	153
5.3.3	区別のない信心	155
5.3.4	庶民思想と信との結び	157
5.4	信における社会思想史的意義	159
5.4.1	神権理論の解体	159
5.4.2	布教及び庶民教団の規模	160
5.4.3	真宗思想による反体制的性格	163
5.5	まとめ	165
六	晩年における信の変容	167
6.1	晩年の諸事件	168
6.1.1	帰京及び覚信尼の不幸	168
6.1.2	関東教団による造悪無碍の異議	170
6.1.3	善鸞義絶	170
6.1.4	入滅	172
6.2	晩年著作の概観及びその特徴	173
6.2.1	晩年著作の概観	174
6.2.2	晩年思想の特徴	176
6.3	晩年思想の多元的性格—和讃を中心に	181
6.3.1	批判・肯定—『正像末和讃』による弁証的末法観	181
6.3.2	悪の懺悔	187
6.3.3	仏恩報謝と太子謝恩	189
6.4	如来等同一信の究極及び神仙思想の受容	194
6.4.1	如来等同思想	195
6.4.2	如来等同に見る晩年思想の営為	200
6.5	自然法爾における絶対他力	207
6.5.1	自然法爾思想	208

6.5.2 「義なきを義とす」	210
6.5.3 自然と絶対他力	212
6.5.4 自然法爾における晩年の救済論	215
6.6 まとめ	218
七 終章	220
7.1 親鸞の人物像	220
7.1.1 信の軌跡	221
7.1.2 信の源	223
7.1.3 信の特質—唯信、他力	224
7.2 親鸞の歴史的地位	226
7.2.1 親鸞の時代性及び超時代的契機	227
7.2.2 新仏教の庶民化と在家化	228
7.2.3 親鸞の在家仏教における意義	229
7.2.4 信—宗教思想の中核	231
7.3 今後の課題	232
7.3.1 新仏教の全体的考察	233
7.3.2 親鸞思想における中国浄土教の受容	233
7.3.3 親鸞思想における宋元文化の受容	234
参考文献	236
原典・史料	236
参考書	237
論文	239
謝辞	241
付記	243

一 序 論

大陸仏教を基盤として形成された日本仏教は長い間を経て、初めて鎌倉時代において特殊性が現れ、その独自の道に向かうようになった。即ち、平安時代の末期から鎌倉時代の前半にかけ、社会の変革に伴う思想界の革新的動向とし、浄土、日蓮、禅を代表とする新仏教は漸く盛んになり、漸く浄土宗、浄土真宗、時宗、日蓮宗、臨済宗、曹洞宗という六つの新宗が形成され、史上、鎌倉新仏教と称される。新仏教は宗派が林立し、高僧が輩出し、従来、日本民族の歴史遺産^①と評され、その確立は時代に伴う民衆の覚醒、特に武士階層の勃興と庶民の地位的向上を背景としている^②。一方、早く平安時代においてすでに端を発し、中世社会の全般に流布した末法観も主要要素となる^③。新仏教の中の浄土系仏教は前代の念仏を源にし、初めて法然によって浄土宗が開かれた。浄土真宗の開祖である親鸞は法然の直弟子として浄土宗の血脈を継承し、自ら独特な思想を以て伝統浄土教を乗り越え、日本浄土教史上一つの到達点となった。このように、親鸞思想に関する研究は戦後の新仏教研究の主流とし^④、中世思想研究の重要な課題となっている。

①石田一良著『日本思想史概論』（吉川弘文館、1963）p.85を参照。

②赤松俊秀著『日本仏教史』[中世篇]（法蔵館、1967）p15-19を参照。

③辻善之助著『日本仏教史』[二]（岩波書店、1947）p107-132を参照。

④末本文美士著『日本仏教史』（吉川弘文館、1992）p94を参照。



1.1 問題の提起—思想史的視座からの親鸞研究

真宗の門人によって始められ、現在に至るまで行われた親鸞研究は様々な分野にわたって展開されていて、その中、宗学、文献学また歴史学からのものが主である。宗学研究の面では、真宗の教義や經典に対して多くの釈義を行い、現在の研究には大きな比例を占めている。このような宗学の釈義は他分野の研究のための参考を提供するが、宗学者や門人を主役とするこれらの研究は従来「宗義顕揚」を目的とするもので、宗派の立場や教団の意志から受ける影響は明らかである。文献学研究の面では、従来、親鸞の原典に関する批判、解釈、成立史、出典などの研究が行われているが、宗学研究と重なるものもあり、特に一部の釈文や出典の研究は宗学の影響に脱し切れず、宗学的性格を濃く帯びている。

親鸞に関する歴史学の研究は他分野の研究より遅れているが、その史料や原典に基づいて親鸞像を還元する視座は親鸞を歴史人物として捉え、より客観的な事実に接近するもので、親鸞思想の徹底的な解明に重大な意義を持つと思われる。宗学者の信楽峻鷹氏は「今日における真宗学の方法論的課題」の中で、今まで親鸞研究に多く為された宗学の釈義や經典の解釈は、すでにことたりるものではないと指摘し^①、親鸞研究における歴史的視点を強調した。家永三郎氏も『中世仏教思想史研究』において、主観的な説明より実証的な研究を進めるべく、という現代親鸞研究の方法論を指摘した^②。本研究は即ちこのような宗学、文献学と区別する思想史研究の視座より、実証的立場に基づいて歴史人物としての親鸞を考察し、その思想を究明することを通して、より真実の

①信楽峻鷹著『親鸞における信の研究』[上]（法蔵館、2007）p 3-14を参照。

②家永三郎著『中世仏教思想史研究』（法蔵館、1960）p 183-184を参照。